地域通貨と生涯学習

前　平　泰　志

Local Currency and Lifelong Learning

Yasushi MAEHIRA

地域通貨について書いてみたい。

地域通貨とは、よく知られているように、相互扶助の精神に基づいてサービスや行為を時間や点数、地域やグループ独自の紙券などに置き換え、これを「通貨」としてサービスやモノと交換し、循環させる通貨のことであり、日本円やドルなどの国家に管理された法定通貨とは異なっている。地域通貨の目的や発行主体、発行方法等多様な地域通貨が国内、国外を問わず流通している。

ひところよりブームは去ったといわれるものの、地域通貨なる言葉は、メディアでも盛んに取り上げられている。2006年12月現在で日本国内における地域通貨の種類は600を超えていると言われている。もちろん、そのなかには、休止中のものや名目だけのもの、一時的なものに過ぎないものなども含まれているに違いない。しかし、構造改革特別区法を使った自治体を巻き込んだ地域通貨の導入を模索しているところなど、新たな構想のなかに地域通貨を位置づけようとしている取り組みも少なくない。従来のまちづくりや福祉、エコロジーなど様々な固有の目的や課題をもった地域通貨の実践もまた、今後もとどまることなく現れてくるであろう。

学校教育や子どもの世界にも地域通貨が導入されているのも目を引くところである。学校の教科書や授業科目のなかに取り上げられているだけでなく、「ミニさくら」のような子ども自身が中心になった地域通貨実践がなされているところや、子育て支援という母親どうしのネットワーク作りにも活用されているところもある。そこには、経済の仕組みを教えるという目的や意図を超えて、他者との関係のあり方や、現在の社会システムに対する批判的な対峙といった問題意識を読み取ることもできる。生涯学習論が関与してくるのはこの文脈においてである。

とはいえ、これまで地域通貨を教育論の観点から論じられたものは極めて少ない。とりわけ、生涯学習とのコンテクストで取り上げられることはこれまでほとんどなかった。筆者は、ここ10年くらい前から、地域通貨の実践と理論における生涯学習との接点に注目し、学内外で研究会を組織し、研究を進めてきた。社会教育学会においても、ラウンドテーブルを組織し、実践や理論に関心を持つ会員や実際に地域通貨を使って実践している会員外の方をお招きし、報告と議論を行ってきた経緯がある。（巻末に１．社会教育学会の研究活動の概要　２．地域通貨見学　３．地域通貨研究会　４．ラウンドテーブル全５回の内容の紹介を掲載している。）また、韓国での光州市の「生涯学習センター」の見学からはさまざまな知的刺激をいただいた。

また、本誌においても、倉知・安川レポートにあるように、各地の地域通貨の実践（草津市

「おうみ」、千葉「ピーナッツ」、多摩「COMO」、府中「ナマケ」、オンライン上の通貨、「Q」愛隣地区「カマ通」など）を視察してきた。また、2年前から京都府下の南山城村の野殿・童仙房地域をフィールドに様々な教育実践活動を行ってきているが、昨年から不定期ではあるが、同地域に「風と雲の市」と名づけた、子どもを対象にした「市」を開催し、そのなかで地域通貨「チャオ！」を新たに創造し実践している。

地域通貨は、「まちづくり」「地域おこし」などのスローガンに見られるように、地域の経済やコミュニティの活性化に繋がるものとして脚光を浴び、そのようなものとして様々な実践が繰り広げられていることが多い。従って、地域経済や社会政策などの文脈で取り上げられることが多いが、いずれも学習論や教育論という観点からの研究は皆無と言ってよいほど未開拓である。地域通貨は、今日の一元化された財・サービスの経済的な価値のみを伝達する一般の通貨と異なり、その媒介自体が、自由と責任、共生、知の透明性・公開性等の汎用メッセージを伝達する象徴的な手段として機能している。そこに、文化や価値観や人間の意識変容までを含んだきわめて教育―学習論的色彩を読み取ることは困難ではないであろう。地域通貨は生涯学習とインターフェイスする可能性が、きわめて大きいことがよく了解されるはずである。まちづくりやインフレ・失業対策などのオールタナティブな社会政策や経済理論とは別に、日々の営為のなかのインフォーマルな学習実践を通じて、参加者の貨幣に対する認識を変えるばかりか、価値観そのものを問い、人間と人間、人間と自然、人間とものとの、関係の認識を変えていく、きわめて学習的な実践であるのである。地域通貨自体のもつ学習論的な意義がここにあると言えよう。

また、この地域通貨実践の領域は、福祉や子育て、環境問題など市場のサービスに完全には組み込まれない領域である。しかも、メンバーである実践者がそのようなスキルに熟達することなしには維持管理や運営ができない点でも学習論的な意義が認められる。

さらに、地域通貨の実践は、学習のネットワーク論を超える生涯学習論の可能性が秘められている。学習のネットワーク論を最初に提唱したのは、『脱学校論』で著名なイヴァン・イリイチであるが、そこでは、学習のみを交換する「ラーニング・ウエッブ」の構想が提示されていただけであった。しかし、地域通貨の世界は、学習活動のみならず、学習以外の活動やものなどが交換されるのである。そこには、インフォーマルな学習がそうであるように、この実践のシステム総体において、教育者－被教育者という固定された教育的関係は成立しない。それは、時・場合・相手に応じて教育者であったり学習者になったりするだけの永続的な交換の関係があるだけである。さらにいえば、自己の個性や価値観に応じて多種多様な地域通貨を時・場所・相手に応じて使い分けられるようになると、個人の多元的なアイデンティティを持つことが可能になり、限られた地域や国境を超えることも、また多元的な性や人格を持つ個人の出現も、可能になるであろう。このような新しい学習スタイルを探求する地域通貨の実践とそれに呼応する新たな生涯学習の理論的実践も今後出現する可能性もある。

地域通貨は、本来的に、コミュニティにおける「互酬」ネットワークを拡大し、異質の他者と出会い、異質なままに共に生きる時間と空間を共有するコミュニケーションの媒体である、ということができる。地域通貨を媒介にすることによって、各人が各人の時間を他者とのかか

わりのなかで交換し合う、<関係としての時間・空間>、すなわち、単純な贈与や交換、再生産の時間・空間ではなく、互酬にもとづく<共に生きられる時間・空間>を析出することが可能になるだろう。地域通貨の<地域>とは、その意味でローカルな知そのものだと言えるのである。

1．日本社会教育学会研究報告

①　6月集会

ラウンドテーブル②「地域通貨制度と生涯学習」

日時：2003年6月22日（日）9：30～12：00

場所：お茶の水女子大学

コーディネーター：前平泰志（京都大学）

報告者：前平泰志（京都大学）

関上哲（東京農工大学大学院）、

倉知典弘（京都大学大学院）

②　第51回研究大会

ラウンドテーブル⑦「地域通貨制度と生涯学習　その2」

日時：2004年9月19日（日）9：30～12：00

場所：同志社大学

コーディネーター：鈴木久美子（多摩市役所）

倉知典弘（京都大学大学院）

報告者：関上哲（東京農工大学大学院）

斎藤美冬（COMO倶楽部運営委員）

遠藤礼子（キョートレッツ・コーディネーター）

③　6月集会

プロジェクト研究「グローバル時代における〈ローカルな知〉の可能性―もうひとつの生涯学習を求めて」―「地域通貨と生涯学習のインターフェイス」

日時：2005年6月5日（日）9：30～12：00

場所：東京大学

司会：国生寿（同志社大学）

朝岡幸彦（東京農工大学）

報告者：嵯峨生馬（日本総研）「地域通貨―教育のメディア・共生のメディア」

鈴木久美子（多摩市役所）「子育て期の親による地域通貨実践」

関上哲（東京農工大学大学院）「地域通貨の教育経済的アプローチ」

④　第52回研究大会

ラウンドテーブル④「地域通貨制度と生涯学習　その4」

日時：2005年9月18日（日）9：30～12：00

場所：千葉大学

2．地域通貨見学

2003年３月18日（木）「おうみ」（13：30～）

2004年７月24日（土）「キョートレッツ」見学（15:00～）

2004年９月25日（土）「キョートレッツ」「９月レッツ市」

2004年８月20日（金）～22日（日）関東地域通貨見学

９月20日（月）通称「釜ヶ崎」地域見学

3．地域通貨研究会

2003年５月24日（土）地域通貨研究会（14：00～）教育学研究科（小集団実験室）

2003年６月14日（土）地域通貨研究会（14：00～）教育学研究科（小集団実験室）

2003年７月26日（土）地域通貨研究会　関西セミナーハウス（ゼミ合宿）

2003年11月８日（土）地域通貨研究会（14：30～）教育学研究科（小集団実験室）

2004年１月30日（金）地域通貨研究会（14：30～）教育学研究科　小集団実験室）

2004年４月３日（土）地域通貨研究会（14：30～）教育学研究科　小集団実験室）

2004年５月８日（土）地域通貨研究会（15：00～）教育学研究科（小集団実験室）

2006年８月10日（木）地域通貨研究会（旧野殿童仙房小学校）（夏季セミナー）

4．ラウンドテーブル全５回の内容の要旨（この項は倉知典弘氏と関上哲氏の協力を得た。）

①「地域通貨制度と生涯学習　その１」

このラウンドテーブルは、世界的に大きな広がりを見せている地域通貨を社会教育・生涯学習の視点から考察することを目的として設けられたものである。

当日の報告は以下の通りである。呼びかけ人の前平泰志会員（京都大学）の趣旨の説明に続いて、倉知が地域通貨を概観した。地域通貨の日本における広がり、理論的背景が説明された。次に鈴木久美子会員（多摩市職員）が、多摩において行われたCOMOプロジェクトにおける親子の地域での学びの展開の実践が報告された。最後に、「地域通貨と学びのインターフェイス」という題目で、関上哲会員（東京農工大学大学院）からの報告がなされた。氏の取り扱ったものは「エコマネー」に関するものであるが、地域通貨における信頼の原理等をもとに学習との関係を論じるものであった。今回は20名ほどの参加者が見られたが、オブザーバーとして地域通貨を実際に利用して情報の交換を行っている「地域情報研究所」の所員が、議論に参加してくれたことも特筆されてよいと思われる。また、フロアーからの質疑応答も日本の「講」や贈与論との関連など今後の研究の展開を予想させるような興味深いものであった。

今回のラウンドテーブルは、地域通貨研究の初めの一歩であり、まだまだ手探りであった。今後も今回のようなラウンドテーブルを設け、継続的に研究を行って行きたいと考えている。

（文責：倉知　典弘）

前平泰志（京都大学）　「趣旨説明」

倉知典弘（京都大学大学院）　「地域通貨の概観」

鈴木久美子（多摩市役所）　「COMOプロジェクトにおける親子の地域での学びの展開」

関上　哲（東京農工大学大学院）「地域通貨と学びのインターフェイス」

②「地域通貨制度と生涯学習　その２」

一時期の加熱状況からは幾分落ち着いた感がある地域通貨であるが、今でも多くの新しい実践が生まれている。その地域通貨の実践には、経済的な期待もさることながら、学習の契機が多く含まれている。本ラウンドテーブルは、地域通貨の実践を生涯学習の視点から検討するために設けられた。

当日は、まず前回のラウンドテーブルの呼びかけ人であった前平泰志会員（京都大学）からラウンドテーブルの意図の説明があった。次に、コーディネーターである鈴木久美子会員（多摩市役所）から、形式など地域通貨の概略の説明があった。その後、関上哲会員（東京農工大学大学院）の報告「地域通貨実践のスタッフ力量形成－『ピーナッツ』とNPOの力量形成－」がなされた。佐藤一子の研究をモデルとして、千葉県のピーナッツの中心にいる二人の力量の比較を行うことで、地域通貨運営に関わる力量形成とNPOにおける力量形成との相違を論じようとするものであった。次に、斉藤美冬氏（COMO倶楽部運営委員会）から「地域通貨体験談」として、地域の祭りの中に地域通貨COMOを導入した際の話がなされた。そこでは、子どもの「ハローワーク」を設け、そこでCOMOを発行し、フリーマーケットなどの形でCOMOを利用する場所を設けるという活動を通じて、子どもの地域行事への主体的組織が生まれ、祭りの活性化を促進したという事例が報告された。最後に、遠藤礼子氏（キョートレッツコーディネーター）からキョートレッツの取組みについて説明があった。地域通貨の利用が、現実的にはコアメンバーのみに限られるなどの困難さがデータなどをもとに語られた。

本ラウンドテーブルには、10名程度が参加した。その中には、地域づくりの検討の中で地域通貨に出会い、それがどのようなものであるのかという疑問から参加した会員や社会教育関連の事業で地域通貨の話をしているが「ビジネス」と捉えられることに戸惑いを感じている会員、大学と地域との連携に地域通貨がどのように導入可能かということを考えている会員もいた。今回は、各自が持っている疑問などを率直に出し合いながら地域通貨の生涯学習的な意義の理解を深めることができたと思われる。今後ともラウンドテーブルなどを通じて活発な論議をしていきたい。

（文責：倉知　典弘）

前平泰志（京都大学）　「ラウンドテーブルの意図の説明」

鈴木久美子（多摩市役所）　「地域通貨の概略」

関上　哲（東京農工大学大学院）「地域通貨実践のスタッフ力量形成―『ピーナッツ』とNPOの力量形成―」

斉藤美冬（COMO倶楽部運営委員会）　「地域通貨体験談―地域通貨COMOを利用して」

遠藤礼子（キョートレッツコーディネーター）「地域通貨の利用の困難さ」

③地域通貨と生涯学習論のインターフェイス」その３

地域通貨の実践は、学習のネットワーク論を超える生涯学習論の可能性が秘められている。インフォーマルな学習がそうであるように、この実践のシステム総体において、教育者―被教育者という固定された教育的関係は想定されていない。そこでは、時・場合・相手に応じて教育者であったり学習者になったりするだけの永続的な関係があるだけである。だが、地域通貨

と生涯学習が交錯する地平は、それだけを意味しない。自己の個性や価値観に応じて多種多様な地域通貨を時・場所・相手に応じて使い分けられるようになると、個人の多元的なアイデンティティを持つことが可能になり、限られた地域や国境を超えて、また多元的な性や人格を持つ個人の出現も可能になるであろう。このような新しい学習の理論的実践も今後出現する可能性もある。

地域通貨は、本来的に、コミュニティにおける「互酬」ネットワークを拡大し、異質の他者と出会い、異質なままに共に生きる時間と空間を共有するコミュニケーションの媒体である。各人が各人の時間を他者とのかかわりのなかで交換し合う、〈関係としての時間・空間〉、すなわち、単純な贈与や交換、再生産の時間・空間ではなく、互酬にもとづく〈共に生きられる時間・空間〉を析出することが可能になるだろう。ローカルな知が着地するひとつの可能性がここにも見出される。

（文責：前平泰志）

嵯峨生馬（日本総合研究所）　「地域通貨―教育のメディア・共生のメディア」
鈴木久美子（多摩市役所）　「子育て期の親による地域通貨実践」
関上　哲（東京農工大学大学院）　「地域通貨の教育経済的アプローチ」

④「地域通貨制度と生涯学習　その４」

本ラウンドテーブルは、一昨年度六月集会以来行われてきた議論を継続する形で行われた。今回は、報告者を含めて15名が参加した。

当日は、三名の実践者から報告をいただいた。まず、長谷智子氏（調布地域通貨"さ～ら"の会）から、自分が地域通貨に関わるようになった経緯、現在関わっている地域通過"さ～ら"など、幅広い報告がなされた。地域通貨が異世代交流のツールになっている点や、地域で子育てをするうえで、親の育ちをうながしうるツールとなっている点などが評価された。だが、地域で循環させるためには、適切なマッチングが不可欠であり、コーディネータの必要性が指摘された。次は、野村卓氏（東京農工大学大学院）による「青年の自立支援における地域通貨の現状と課題―コミュニティベーカリー、緑の学校と地域通貨ニローネ、M-seedsの展開事例から―」の報告であった。自立支援のNPOの活動の中で、わたる人間関係をより多様化する目的で導入された地域通貨ニローネの一年にわたる活動を紹介し、その過程で露呈した課題をあげ、自立支援における地域通貨導入の困難性が指摘された。人間関係に疲れ、引きこもりをしている青年に対して、信頼をもとにする地域通過が関与できるかという課題を投げかける報告であった。最後に、安藤頌子氏（エト研究会）による「けやきコミセンにおけるエコマネー（地域通貨）『エト』の誕生の秘密、ならびに『エト研究会』の活動について」であった。まず、"エト"の活動がけやきコミュニティセンターにおける学習会から発展した過程や、けやきコミセンにおける活動に地域通貨"エト"を導入する実践が述べられ、地域通貨による社会教育実践のありかたが提示された。

今回は、参加者から地域通貨に対するクリティカルな発言もいただいた。今後も、指摘された様々な論点を検討し、地域通貨と生涯学習の関連について研究をさらに深めていきたい。

（文責：倉知　典弘）

長谷智子（調布地域通貨"さ～ら"の会）　「地域通貨"さ～ら"について」
野村　卓（東京農工大学大学院）
「青年の自立支援における地域通貨の現状と課題―コミュニティベーカリー、緑の学校と地域通貨ニローネ、M-seedsの展開事例から―」
安藤頌子（エト研究会）
「けやきコミセンにおけるエコマネー（地域通貨）『エト』の誕生の秘密、ならびに『エト研究会』の活動について」

⑤「地域通貨制度と生涯学習　－　その５」

本ラウンドテーブルは五回目を迎え、参加者の考える地域通貨への期待が、最後まで議論を深めるものとなった。

前平泰志（京都大学）会員は「地域通貨と生涯学習制度」をめぐって、生涯学習が抱えている問題点を克服するためのツールとして地域通貨が韓国で注目されていること、そして韓国での初めての試みとしての地域通貨について報告した。最初に地域通貨は、前近代・近代・ポスト近代と時代の経緯の中で、地域社会の学習機能が失われ、その機能を取り戻すものに地域通貨が人と人の連携を築く学びとして利用され、生涯学習でも重要であることが語られた。さらに、K・ポランニーの互酬・再分配など実態論的経済観の持つ特色が今日の地域社会では重要であり、地域通過は人と人の関係の中で学びを交換できるものとして注目されると紹介された。韓国での地域通貨"グル"は、エドガー・カーン氏の時間銀行を参考に流通しているものであり、生涯学習センター内ではあるが時間を学びとの関連で、試験的に試みられている地域通貨であることが紹介された。最後に地域通貨の機能はローカルな知を考える時には地域の人間的な能力を発見するものとして重要なkeywordであるということに参加者は注目した。

次に長岡素彦氏（地域情報研究所）からは、地域通過による生涯学習講座について報告がなされた。氏は、地域通貨実践家として、幅広い取り組みに参画している経験から、特に千葉の上尾ビレッジでの地域通過や、お母さんの地域通過会議での"ミニさくら"導入に当たり、子どもたちの学びの可能性に地域通貨が果たす役割が興味深く紹介された。

次回は議論の中で論点となった、「大人と子どもの学び」を補完する地域通貨の可能性がさらに深められることを望みたい。　（文責：　関上　　哲）

前平泰志（京都大学）　「地域通貨と生涯学習制度」
長岡素彦（地域情報研究所）　「地域通貨による生涯学習講座」